

日本における森林管理認証（FM 認証）の 比較および考察

小端 あゆ美

キーワード： 森林認証、FSC、SGEC、環境政策手法

1. 研究の背景と目的

持続可能な森林管理を行うための自主的な取り組みとして、世界的に森林認証制度が注目を集めている。日本国内では現在、国際的な認証制度である FSC 認証と国内向けの認証制度である SGEC 認証という 2 つの制度が実施されている。本論文では、第一に、森林認証が持続可能な森林経営にとって有用であるという認識は普及しているのだろうかという点について論じることを目的とする。その上で、国内における 2 つの認証制度を比較し、どちらの認証を取得するほうが持続可能な森林管理を行う上で望ましいのかを第二に検討する。

2. 研究方法

第一の問いに対しては、森林認証制度の成立した背景や森林認証を巡る歴史的経緯から、認証制度の有用性についての認識がどれだけ広まっているかを探った。また、第二の問いに対しては、2 つの認証制度の設立過程、主体の違いを考慮に入れながら、国内の認証件数・面積の増加傾向と、環境 NGO による評価を比較し、その内容について検討した。

3. 結果

世界的な森林の減少・劣化が 20 世紀末に大きな環境問題として捉えられるようになった。そうした中、1992 年に開かれた国連環境開発会議において「持続可能な森林経営」という理念が提唱され、国際的にその推進に向けた取り組みが求められている。だが、現時点では法的拘束力のある文書の合意には至っておらず、欧米を中心に民間で導入されている森林認証制度が、持続可能な森林管理の普及に役立っている。

日本でも木材の利用について持続的な森林管理が重視されるような変化が起こっている。企業による CSR の推進により、原材料の調達方針や取り扱い方針を策定する動きが見られる。また、2006 年 4 月にグリーン購入法が改正され、政府調達品目において原材料である木材の伐採が合法である必要が出てきた。これらの中で、原材料について確認する手段の一つとして森林認証が挙げられている。

このように普及の必要性が高まっている森林の FM 認証だが、国内では FSC 認証と SGEC 認証とがそれぞれ認証面積を広げている。先行した FSC に比べて、コストの安さや認証取得の簡便さから、SGEC のほうが認証件数と面積を伸ばし、より普及しつつある。ただし、FSC のほうが NGO からの評価は高く、基準もより厳格であるとされる。だが、SGEC は業界全体の底上げを意図した制度であり、日本全土で持続可能な森林管理を行っていく上では一層の普及が望まれる。

4. 結論

第一の問いに対しては、持続可能な森林経営に向けて森林認証はその手段の一つとして有用であるという認識が広がっていることが確認できた。持続可能な森林経営が重視される社会状況にあって、第三者による評価が確認できる森林認証を使用する動きが広がりつつある。

第二の問いに関して、2 つの制度の比較を行った結果、現時点では社会的に SGEC 制度の広範な導入が必要だと考えられる。森林認証が有用であるという認識が広まる中、より取得しやすく、ひいては継続も容易である SGEC 認証制度の導入を広げることにより、日本全体で森林管理レベルの底上げが期待される。